

グローバル・ガバナンス論演習・一学期シラバス

2015年4月13日

阪口 功

isao.sakaguchi@gakushuin.ac.jp (*→@)

TEL: 03-3986-0221 内線 4820

法学部共同研究室 内線 4800, 4801, 4803

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~20050137/index.html>

1. 教科書

- ① 川崎剛『優秀論文作成術』勁草書房、2010年。
- ② 自習用：山田高敬ほか『グローバル社会の国際関係論』有斐閣、2011年。
- ③ 大矢根聡『コンストラクティヴィズムの国際関係論』有斐閣、2013年。
- ④ 吉川 直人『国際関係理論』勁草書房、2006年。
- ⑤ 杉田米, *Understanding International Relations: The World and Japan*, 大学教育出版、2013年。
- ⑥ Jeffrey A. Friedman, et. al., *World Politics: Interests, Interactions, Institutions*, New York: W. W. Norton, 2010. (日本語文献と置き換え)

※ 論文を配布する場合は研究室 HP を通じて配布。 ※ 要パスワード

2. 評価

- ① 出席 (20%)
 - ・ 無断欠席厳禁 (1回につき-10点、2回でアウト)、発表のすっぽかし (1回でアウト)。
 - ・ 遅刻・欠席の連絡は本人が直接電子メールで行うこと。
 - ・ 就活のための欠席には配慮するが、その場合であっても課題を提出する義務を負う。
 - ② プレゼン&レジメ(20%)
 - ・ 輪読文献については、全員読んでいることが前提のため、発表はポイントをおさえて10分をめどに行うこと。
 - ・ 詳細な説明は「詳しくはレジメの・・・をご覧ください」と省くこと。
 - ・ 輪読文献の報告の場合は、レジメ最後に疑問点や「考察」を付記する。
 - ① ディスカッション(20%+)
 - ・ 報告担当者以外は、各週の課題文献について、考察、疑問点、問題提起などをメモ書きし、G-Port にアップし、また授業に持参のこと。
 - ② レポート (40%)
 - ・ 単位取得の必須条件である。
 - ・ 就活に備え、早めに準備すること。夏休みに文献・資料の調査収集を進めることは特に大切。取り組みが遅れ就活との両立が困難となっても配慮はしない。
- ※ 単位を取得できなかった場合次年度のゼミへの参加資格を失う。

3. TA、委員の選出、ゼミ合宿について

- ・ TA：大館さん
- ・ 委員長 4 年：
- ・ 副委員長 3 年：
- ・ 名簿担当：
- ・ 宴会隊長：
- ・ ゼミ合宿運営委員会：
- ・ 優秀論文ゼミ選考委員会：

4. ネットシステムについて

(1) G-Port

- ・ レポート、報告レジメは、すべて G-Port にアップ。

(2) Dropbox

- ・ ゼミのレジメ、レポート、写真、名簿などを共有するためのものです。登録する PC メールアドレスの登録が必要。

(3) Facebook ゼミグループページ

- ・ 現役ゼミ生、OB・OG ゼミ生のグループページ。交流、就活に活用して下さい。

5. 授業スケジュール

(1) 4月13日

- ・ ガイダンス及び担当決め

(2) 4月20日:

- ・ 福田のぞみ「なぜ中国は援助政策においてアフリカを重視するのか」: 小川
- 川崎『優秀論文作成術』
 - ・ 第1章「まずは3つのPを念頭に置く」: 全員
 - ・ 第2章「論文の骨格をつくる」: 中村

(3) 4月27日:

- ・ 福田のぞみ「なぜスイスは徴兵制を維持しているのか」: 能登
- 川崎『優秀論文作成術』
 - ・ 第3章「論文の細部を仕上げる」: 越部
 - ・ 第6章「卒業論文攻略法」: 神崎

(4) 5月11日: リアリズム

- ・ 吉川『国際関係理論』4章: 高木
- ・ J.A. Frieden, World Politics, Chap3: 小川(hard)
- ・ 先輩から学ぶ: 伊藤 (2006) 「米国の対キューバ経済制裁」: 横山

(5) 5月18日: リベラリズム

- ・ 吉川『国際関係理論』5章: 度会
- ・ 飯野『英語で政治経済学しませんか』Chap3: 能登
- ・ 先輩に学ぶ: 鷲本 (2006) 「日米牛肉戦争とBSE問題: O I E レジーム」: 小山

(6) 5月25日: コンストラクティビズム

- ・ 吉川『国際関係理論』8章: 神崎
- ・ 杉田, Understanding International Relations, Chap2: 中村

(7) 6月1日: 休講

(8) 6月8日: 批判理論・従属論 ※ 飛行機が遅れると休講の可能性あり

- ・ 吉川『国際関係理論』7章: 蛭谷
- ・ 先輩に学ぶ: 中井 (2011) 「何故モンゴルは民主化を実現できたか」: 越部

(9) 6月15日: 世界市民社会論

- ・ 大矢根『コンストラクティヴィズムの国際関係論』6章: 小山
- ・ J.A. Frieden, World Politics, Chap10: 川嶋 (hard)
- ・ 先輩に学ぶ: 赤井 (2009) 「国際刑事裁判所 (ICC) はなぜ作られたのか?」: 高木

- (10) 6月22日：安全保障
- ・ 清水耕介「人間の安全保障論」小田川ほか『国際政治哲学』：蛭谷
 - ・ 飯野『英語で政治経済学しませんか』Chap3：度会
- (11) 6月29日：休講
- (12) 7月6日：国際政治経済
- ・ 吉川『国際関係理論』6章：川嶋
 - ・ 飯野『英語で政治経済学しませんか』Chap4：横山
- (13) 7月13日：自由研究課題テーマ発表①：3年生
- (14) 7月16日（木）4限：自由研究課題発表テーマ表会②：4年生
- (15) 7月16日（木）5限：予備日

6. その他のスケジュール

- (1) ゼミ合宿：
- ・ 立命館大学・足立ゼミとの合同合宿 in 京都。
 - ・ 今年度は11月から12月。
- (2) コンパ：
- ・ 新歓コンパ：4月下旬から5月中旬
 - ・ 忘年会または新年会
 - ・ 追い出しコンパ：2月末から3月にかけて。早い段階で日程を確定させる必要。
- (3) ゼミ説明会
- ・ 2月初め。

自由研究課題について

1. 課題：因果関係に関する実証分析

・「問い」を立てその問いに対して「仮説」を複数設定して検証する「**仮説検証型**」の実証研究を課題とする。テーマは自由。

- ① 「何（事例）」を研究するのかをまず決定。課題は**国際的な要素**を含むものに限定。
- ② その事例において「**なぜ（Why?）**」または「**どのようにして（How?）**」という問い（基本的疑問）をいくつか立てる（1つでも可）。
- ③ その基本的疑問に対する仮の答え（仮説）を**思考錯誤**した上で、複数立てる。その仮説には、少なくとも1つ自分の**オリジナルな仮説**が含まれている必要がある。
- ④ 仮説を考える際、「**国際政治 III**」やゼミで学んだ**理論**を適用してみる。
- ⑤ **夏休み中**に文献・資料収集を行い、事例を深く調査、分析し、どの仮説が妥当するのかわかりをつける。
- ⑥ 二学期末にレポートを提出すること。
 - ・ 横書き、A4、**40字×36行**、「である調」で作成すること。
 - ・ 字数は10000字相当（表紙をのぞく）で作成。枚数の上限はなし。
- ⑦ レポートの「**結論**」部分でレポートにより新たに明らかになったことを明記すること。
- ⑧ レポートを作成する際、他人の文献（ホームページも含む）に基づいて記述した箇所には注を付けて引用文献を明らかにすること。
 - ・ **注のない論文は未提出の扱いとする**。参考文献目録は注ではない点に注意すること。
 - ・ 注は「**脚注**」形式で作成すること。詳細は、「注の作り方」を参照。

2. オンラインデータベースの活用

- 図書検索
 - ・ 学習院大学図書館 OPAC
 - ・ Cinii Books : <http://ci.nii.ac.jp/books/>
- 論文検索（学習院図書館サイト「データベースナビ」よりアクセス可能なもの）
 - ・ CiNii Articles（日本語論文検索） : <http://ci.nii.ac.jp/>
 - ・ Ingenta(英文雑誌記事検索、フリーアクセス) : <http://www.ingentaconnect.com/>
 - ・ EBSCOhost : (経済、ビジネス関連の雑誌全文記事)
- 新聞検索（学習院図書館サイト「データベースナビ」よりアクセス可能なもの）
 - ・ ヨミダス文書館、聞蔵、日経テレコン21、毎日 News パック
- 本屋さん
 - ・ Amazon.co.jp
 - ・ Google スカラー

注の作り方

(基礎演習のしおり 2007)

阪口 功

(1) なぜ注を作成するのか？

論文では「追跡可能性(traceability)」と「公正さ (fairness)」が求められます。追跡可能性とは、筆者が自らの考えや分析を裏付けるために参照した情報、データなどを第三者も確認できる（でっち上げではない！）と言うことを意味します。公正さとは、他者の考え・分析・調査と自分のオリジナルな考え・分析・調査を明確に分ける（剽窃・盗用ではない！）ことを意味します。追跡可能性も公正さも「注」を付けることにより確保します。

このほかに、本文の内容に対して補足説明するために注を利用することもあります。例えば、長い用語の説明、論文の主題からはずれているが重要な事項などについては、本文に入れて記述してしまうと、冗長になったり、論文の流れが悪くなったりして、読みにくくなることがあります。こういった場合は、本文ではなく注で詳しく説明するとよいでしょう。

注番号は、文章に連番で挿入していきます。注の表示方式には、「脚注」と「文末脚注」の2つの方式があります。脚注の場合、注で示す情報をその注が登場したページの下部にそれぞれ挿入して行きます。文末脚注の場合、注の情報は論文の最後のところに一括して表示します。代表的なワープロソフトには注を自動作成する機能があるので、利用してみるとよいでしょう。

(2) 注を付ける基準

基本的に他者が作成した文献や資料に基づき記述した内容には注を付けます。しかし、全ての情報に注を付ける必要はもちろんありません。通常、広く知られている事実、つまり「周知の事実」に対しては注を付けません。例えば、以下のものなどは注を付ける必要はありません。

- ①「水は化学的には化学式 H_2O で表現される」
- ②「DNA は遺伝情報の担い手である」
- ③「1945 年 8 月に広島と長崎に原子力爆弾が投下された」
- ④「2004 年頃から日本で韓国ドラマがブームとなり、韓流と呼ばれる現象が起きた」

ただし、④の場合、今現在は周知の事実ですが、ブームが過ぎ去り、時間が経つにつれ周知の事実ではなくなります。いつ周知の事実ではなくなったのかを判断するのは難しいところですが、周知の事実ではないと感じたら注を付けるようにしましょう。この場合、過去の新聞記事などを検索して、情報を裏付ける記事の書誌情報を注に明記する程度で十分です。これに対して③は少なくとも我々が生きている間は周知の事実なので、時間が経っても注を付ける必要は生じません。

また、周知の事実ではないものに対しては注を付けると言っても、あまり細かく注を付けるとスペースを浪費し、非効率的となります。例えば、1つの段落で3つの事項を取り上げ、3つとも同じ文献に基づき記述したとしましょう。この場合は、3つにそれぞれ注を付けると非効率的なので、3つの事項の説明が終わったあたりに1つ注を付ける程度で十分です。通常、信頼に足る論文は少なくとも1段落に1つ程度は注が付いていますので、これをおおざっぱな目安（最低ライン）にしてもよいでしょう。もちろん、自分のオリジナルな考えだけで段落を構成している場合は、その段落に注が1つも付かなくても全く支障ありません。

(3) 注における文献の表示形式

① 本の場合：

- ・ 著者名、書名、出版社、発行年、ページ数、の順で記します。
- ・ 外国語文献の場合は出版社の所在都市を明記する必要があります。(邦語の場合は不要)
- ・ 著者名の表記は基本的にその文献が作成された言語に依存します。それゆえ、邦語文献の場合は「氏、名」の順となりますが、英語、フランス語、ドイツ語などでは「名、氏」の順となります。
- ・ 書名の部分は邦語文献の場合は二重括弧『 』でくくります。外国語文献の場合は書名の部分をイタリック体にします。

② 論文の場合(雑誌論文および論文集に収録された論文など)

- ・ 雑誌論文の場合は、著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ数、の順で記していきます。
- ・ 論文集に収録された論文の場合は、著者名、論文タイトル、論文集の編者名、論文集のタイトル、出版社、発行年、ページ数、の順で記します。
- ・ 著者名の表記は「本」の場合と同じです。
- ・ 邦語論文の場合は論文のタイトルを「」で括り、書名または雑誌名を『』でくくります。
- ・ 外国語論文の場合は論文タイトルを“ ”で括り、書名または雑誌名をイタリック体にします。

③ インターネット上のウェブサイトの場合

- ・ 著者名、ページのタイトル、公開(執筆)年月日、ページのアドレス(URL)、閲覧年月日、の順で記します。

※ 閲覧年月日も明記するのは、ウェブサイトは頻繁に改訂、削除されたりするためです。

④ 反復引用の場合

- ・ 既に引用した文献を再度引用する場合は「氏」と「主題」だけの簡略形式で表示します。

【注の例】

- (1) 亀山康子『地球環境政策』昭和堂、2003年、34-38頁 ← 参照した範囲を明記
- (2) 山本吉宣「国際レジーム論：政府なき統治を求めて」『国際法外交雑誌』第95巻、第1号、1996年、2-4頁。 ← 雑誌論文の「一部」を参照（参考文献リストでは全ページを明記）
- (3) Isao Miyaoka, *Legitimacy in International Society: Japan's Reaction to Global Wildlife Preservation*, New York: Palgrave Macmillan, 2004 ← 本全体を参照する場合はページ数は不要
- (4) 山本「国際レジーム論」8-12頁。 ← 再引用につき、「名」、「副題」、「雑誌名」などは省略
- (5) レジーム論に対しては、概念の曖昧さや国家中心主義的指向など様々な批判が投げかけられている。この点に関しては、Susan Strange, “Cave! Hic Dragones: A Critique of Regime Analysis,” in Stephen D Krasner, ed., *International Regime*, Ithaca: Cornell University Press, 1983, pp.337-40. ← 論文集に収録された論文の「一部」を参照（参考文献リストでは全ページを明記）
- (6) 『朝日新聞』2004年12月2日、朝刊。 ← 日本の新聞の場合は朝刊、夕刊を区別
- (7) Karen T. Litfin, *Ozone Discourses: Science and Politics in Global Environmental Cooperation*, New York: Columbia University Press, 1994, p.18. ← 1頁のみ参照する場合は「p.」
- (8) *Washington Post*, 2 July 2001. ← 外国語新聞
- (9) 太田宏「地球環境問題」渡辺昭夫、土山實男編『グローバル・ガヴァナンス：政府なき秩序の模索』東京大学出版会、2001年、295-299頁。 ← 論文集に収録された論文の「一部」を参照
- (10) WWF, “EU Falls Short on Energy Efficiency Again,” 6 December 2005 (http://www.panda.org/about_wwf/what_we_do/climate_change/news/index.cfm?uNewsID=53220, 20 January 2006). ← アクセスした年月日を明記 Vol.は「巻」、No.は「号」の意
- (11) Detlef F. Sprinz and Tapani Vaahtoranta, “The Interest-Based Explanation of International Environmental Policy,” *International Organization*, Vol.48, No.1, 1994, pp.75-80.
- (12) グリーンピース・ジャパン「ブッシュ政権の妨害戦術失敗で、京都議定書、確実に前進」2005年12月10日 (http://www.greenpeace.or.jp/press/2005/20051210_html, 2006年1月20日)。
- (13) Sprinz and Vaahtoranta, “The Interest-Based Explanation,” pp.85-91. ← 雑誌論文の「一部」を参照（参考文献リストでは全ページを明記）
- 再引用につき、「名」、「副題」、「雑誌名」などは省略。「主題」も長い場合は短縮

(5) 論文のポイント

① 2006年度論文集より抜粋

選考で重要となった点は、独創性、客観性、スタイルである。この内、独創性は課題設定の時点ではほぼ決まることになる。選んだ課題に、常識的な視点から見た驚き、理論的な視点（先行研究、既存理論）から見た驚きがないものは、独創的な研究へと発展する可能性は乏しい。

客観性で重要となるのは「本当にそうなのか」と疑う視点である。検証のために自分が選んだデータ、ケースは適切なのか、他の要因が働いている可能性はないか、それぞれの要因がいったいどの程度、またどのようにして作用しているのか、ということをつぶさに検証する姿勢である。それは、様々な病状、状況証拠（問診）、検査結果から病名を確定し、病気の原因を検証する医師の姿勢に近いものである。「結論先にありき」の姿勢は、十分な診断を行わずに治療を行ったり、薬を処方したりする医師のように「誤診」を多発させる極めて危険な姿勢である。研究は真実を探求する試みであり、検証の結果、自分の主張が棄却されることに後悔してはならないのである。

さて、伊藤さんの論文は「米国の対キューバ経済制裁」と題し、冷戦が崩壊し安全保障上の必要性がなくなったにもかかわらず、アメリカはなぜキューバに対して敵視政策（経済制裁）を続けるのかという非常に興味深い疑問を立てて、その要因を亡命キューバ人を中心とする利益団体政治に求めるものである。アメリカがキューバを敵視する理由が、国家の国益や大統領の信条・国民の世論ではなくある種偏狭な利益団体政治にあるという議論はなかなかスパイシーであった。このスパイスのきき具合が最優秀論文に選ばれた最大のポイントである。

甲元さんの論文は「ハンガリーのロマ」と題し、まずロマに対する差別の歴史、差別される要因を検討し、ハンガリーで近年見られたロマ政策の改善はハンガリーのEU加盟のためであり、ロマが置かれた状況を真剣に苦慮してのことではないと論じている。実際、EU加盟後はロマがおかれた状況を改善するための努力がハンガリーで停滞していたことが明らかにされている。甲元さんの論文は、少数民族への差別の解消、または少数民族の保護という人権規範に基づいた行動に見える行為もしばしば利己的な動機に由来することを示している。あえて課題を言うならば、なぜ数ある少数民族問題の中でハンガリーのロマをケースとして選んだのかより一般的に正当化する必要がある。

鷲本さんの論文は「日米牛肉戦争とBSE問題」と題し、米国産牛肉の輸入再開決定のプロセスを二層ゲームと逆第二イメージの視点から分析したものである。鷲本さんは、まず交渉開始時には日本とアメリカがそれぞれ受け入れ可能とする政策領域に重なり合うところがなかったためウィンセットが成立せず、合意のための交渉が進まなかったことを示す。興味深いのはその後の展開である。つまり、OIE（国際獣疫事務局）レジームにより設定されたBSEに関する国際基準が、WTOレジームのSPS（衛生・植物検疫）協定の規定と準自動化された紛争処理手続きを通じて日本の国内政治に影響を与え、結果として日本の国内で受け入れ可能となる政策領域を広げることになる。その結果、日米の間で互いに受け入れ可能な政策領域、つまりウィンセットが成立し、交渉の妥結につながったことが明らかにされている。国際制度が国内政治に影響を与え、それが翻って国際交渉にも影響を与えるという逆第二イメージ的な視点は、国際政治と国内政治の連結性がますます高まりつつあるポスト冷戦期の世界政治を見る上で非常に重要な視点である。

② 2005年度論文集より抜粋

論文では公に議論を展開することが要求される。第一に、自分の考えを他者が理解・納得できるように論じる必要がある。それは、自分の考えをいったん自分から突き放し、あたかも第三者の視点に立って、「本当にそうなのか」、「他の可能性はないか」を事実・データ・資料を照らし合わせながら、試行錯誤し、検証するプロセスである。これこそ実証系の学問・論文で必要とされる基本姿勢である。

第二に、「なぜその問題を取り上げるのか」ということを自問することである。つまり、論文は「私小説」、「日記」、「随想」などと異なり、「自分が興味を持ったから」それについて書くということでは不十分なのである。言い換えると、他の人にも面白いと思える要素を多く持っていないなければならない。これは論文の学術的意義、社会的意義の問題であり、これらに訴えかけるものが全くないような論文は無価値であると言っても過言ではない。自分の論文が対象とする問題（基本的疑問）に、一般的常識に反するような「驚き」、既存の学術的理解や理論を覆すような「発見」、これまで誰も深く分析しなかった「新規性」、重要な社会的課題に貢献できる要素つまり「社会的有益性」など（の少なくとも一つ）が含まれているかどうかよく検討する必要がある。こういった要素の有無は、書き出しの数ページを読めば分かるものである。つまり、書き出しの数ページを読んでみて、「意外だな」、「なぜなのかな」、「面白そうだな」、「役に立ちそうだな」などの言葉が出てくるような論文であれば、期待大の論文である。逆に書き出しの数ページを読んでみて、何とも感じないような論文はほとんど期待できない内容であることが多い（もちろん書くことになれていない学生の論文には例外も多いが）。

論文を書く上で行う作業、つまりいったん自分から離れて、第三者的な視点で、公の視点で、自分の考えや思いを客観的に問い直し、検証するという作業は、大学卒業後の生活（仕事、家庭など）でも見えない形でゼミ生を支援するはずである。その一つの例として「Aさん（♀）はなぜBさん（♂）と結婚したのか？」という問いに対して、現実主義、合理主義、社会構成主義などの知見に基づき試行錯誤しながら複数の仮説を探しだし、それぞれの仮説を模擬的に検証するという作業をゼミで行ったこともある。その際、打算（合理主義）による結婚のリスク、愛（社会構成主義）が「保険」の機能を果たし長期的には「生存」に有益であるという話をした。若さに満ちあふれた学生を前にしてやや浪漫に欠ける話であったが、それはともかくとして、学問を通じて身につけた能力は、いろいろな場面で本人が気づかないうちにその人を支えているのである。「学問は実社会では役に立たない」という言葉をよく耳にするが、それは学問を味う努力をしなかった人たちの戯言である。